

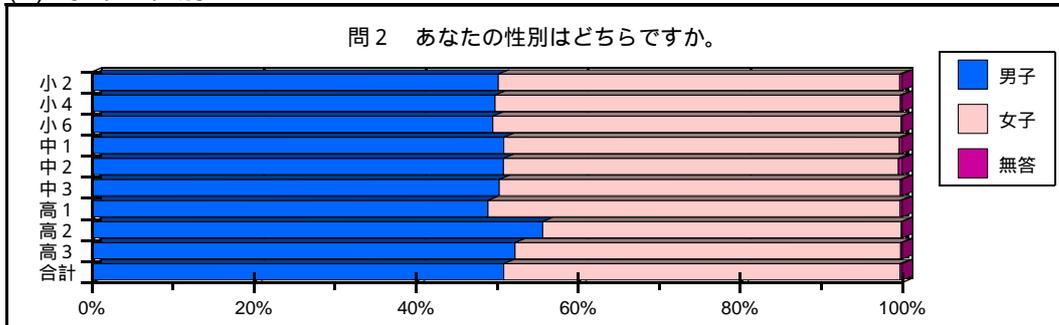
1 実態調査の分析

(1) 児童生徒

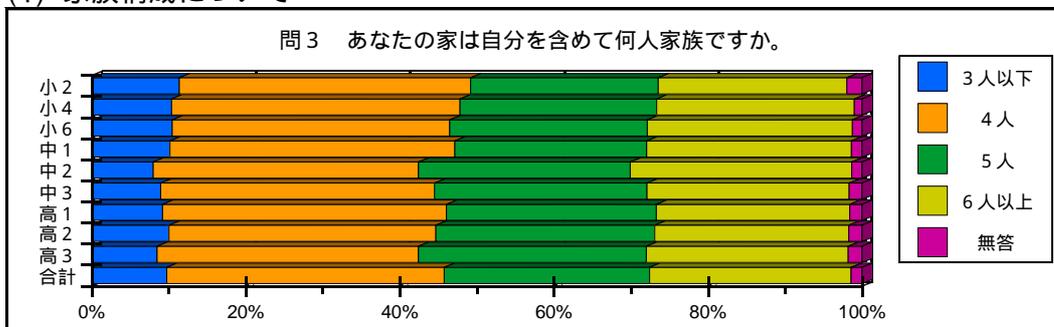
ア 基礎項目について

アンケート対象者の家庭や学校、友だちとの在り方は、以下のとおりである。

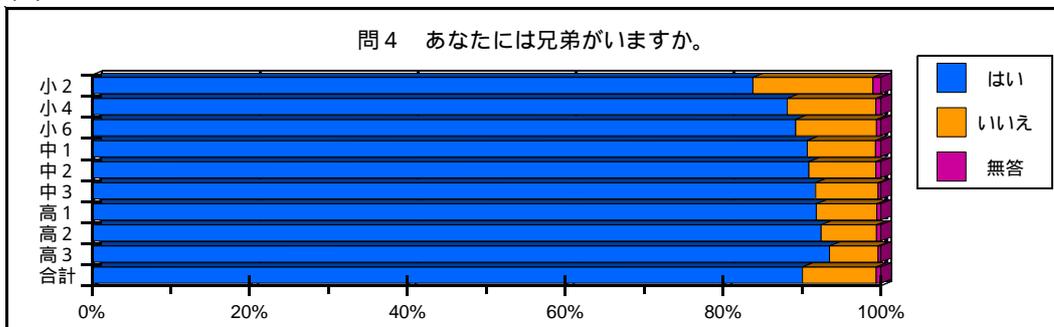
(ア) 学年と性別について



(イ) 家族構成について

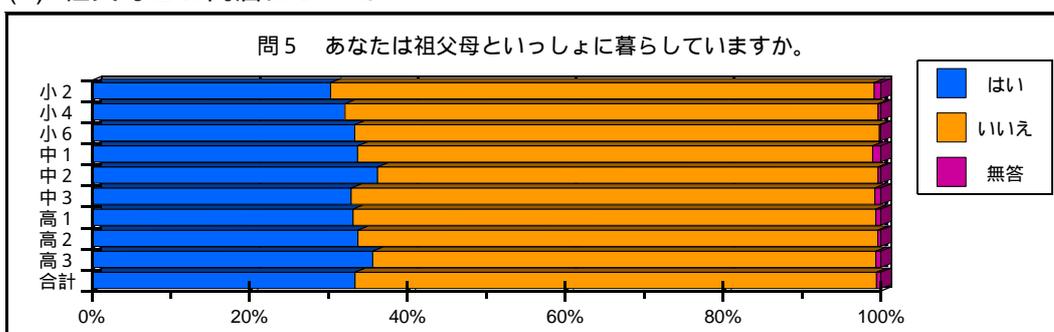


(ウ) 兄弟について



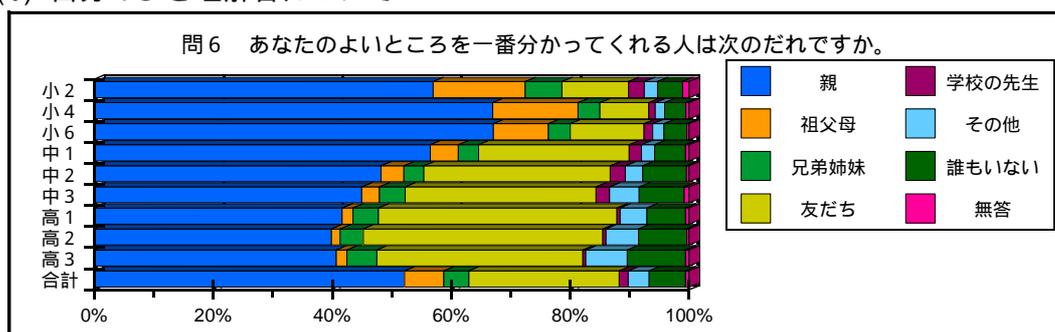
兄弟なしの割合は小学2年生で一番高く15.2%である。また、学年が進むにつれてその割合は低くなる。

(イ) 祖父母との同居について



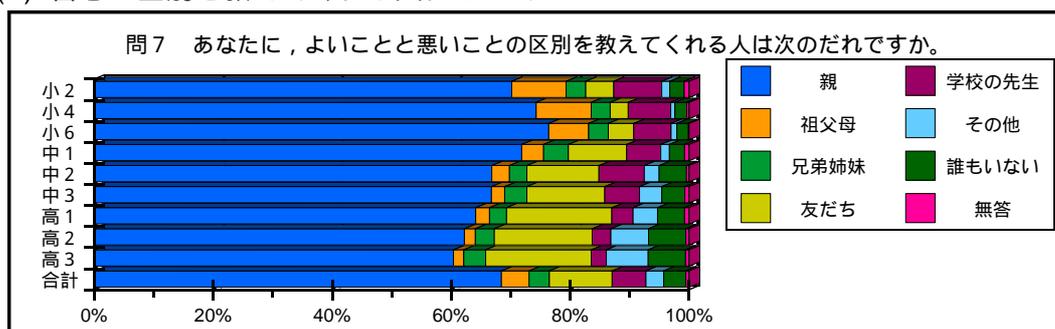
祖父母との同居の割合は33.6%であり、児童生徒の3人に1人は同居している。

(オ) 自分のよき理解者について



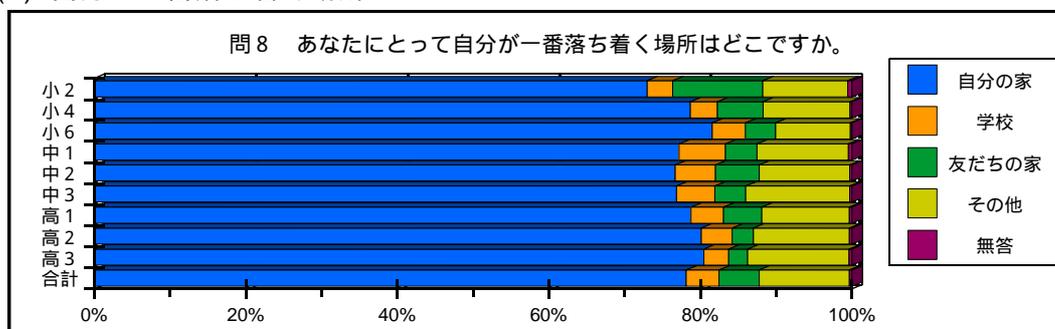
自分のよき理解者は「親」が52.2%と最も高く、二番目は「友だち」の25.3%である。また、「親」を選択する割合は、小学4年生より学年が進むにつれて低くなり、逆に「友だち」の割合が高くなる。これは思春期の特徴として、児童生徒の行動が「親」から「友だち」にシフトしているものと考えられる。一方、「誰もいない」と回答する児童生徒が6.1%も存在することは、非常に気になる。また、これらの児童生徒は、[自分が好き(自己肯定感)], [自分にはよいところがある(自己存在感)], [人の役に立っている(自己有用感)]とのクロス集計において、否定的な傾向がみられる。さらに、「学校の先生」を選択する割合は1.5%と選択肢の中で一番低い。

(カ) 善悪の区別を教えてくれる人について



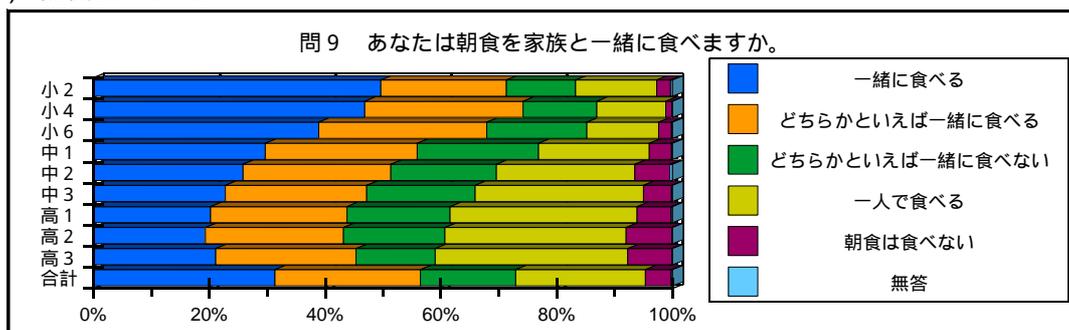
善悪を教えてくれる人は「親」が68.5%と一番高く、「友だち」が10.6%と2番目に高い。特に、「友だち」は中学生、高校生でその割合が高くなる。ここでも、「学校の先生」を選択する割合は5.7%と低い。が、「教育の原点は家庭である（教育改革国民会議報告より）」という考え方からすれば妥当な結果であろう。

(キ) 自分が一番落ち着く場所について



自分が一番落ち着く場所が「自分の家」と回答した児童生徒は、78.2%と一番高い結果である。しかし、「その他」と回答した割合が11.9%あり、この中には自分の居場所がどこにもないと感じている児童生徒が相当数あるのではないかと気に掛かる。

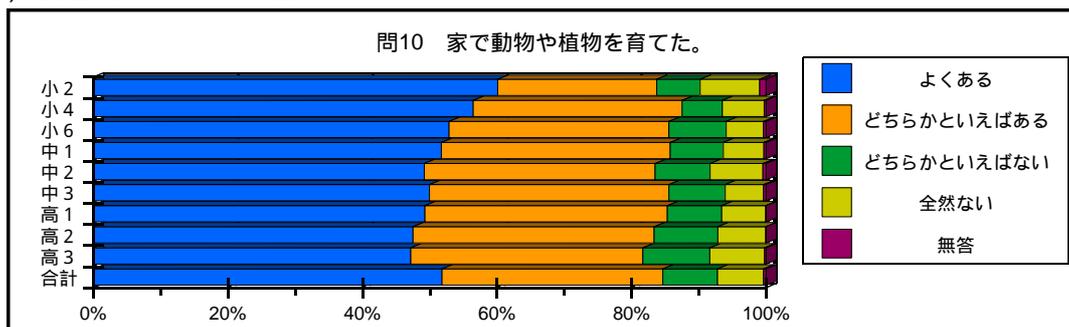
(ク) 朝食について



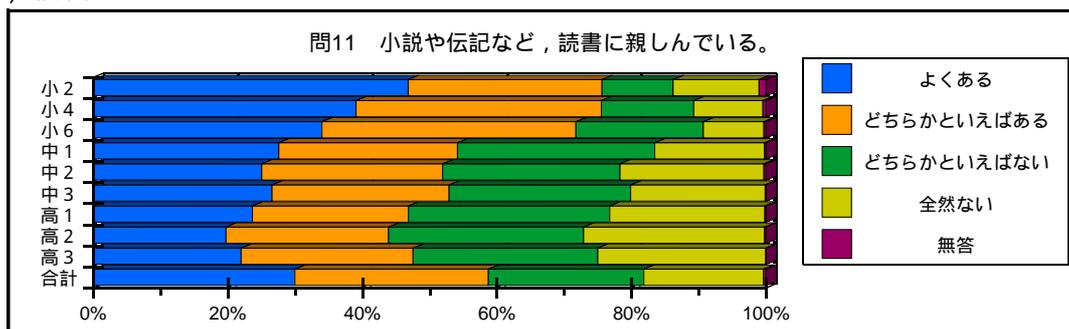
児童生徒の朝食の様子は否定的回答の割合が、小学生26.8%、中学生43.3%、高校生48.6%と学年が進むにつれてその割合は高くなる。また、「朝食は食べない」という児童生徒も全体で4.5%いる。学年が進むにつれて、本人の生活が不規則になっていくのか、部活、勉強等で忙しくなっていくのかは不明だが、食育の観点からも大きな課題ではないかと思われる。また、朝食の様子と自己存在感、規範意識の関係を調べると、家族と共に朝食を食べる児童生徒の方が、自己存在感、規範意識のいずれも高い傾向にある。家族間のコミュニケーションが関係していると考えられる。

イ 体験（経験）の豊かさについて

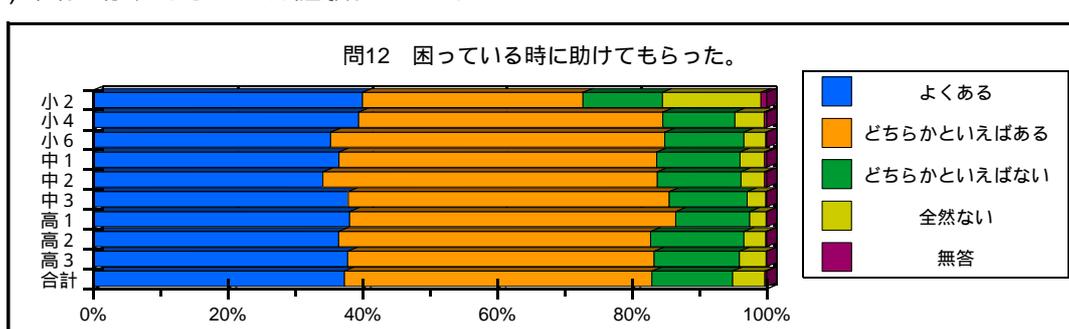
(ア) 動植物の飼育栽培経験について



(イ) 読書について

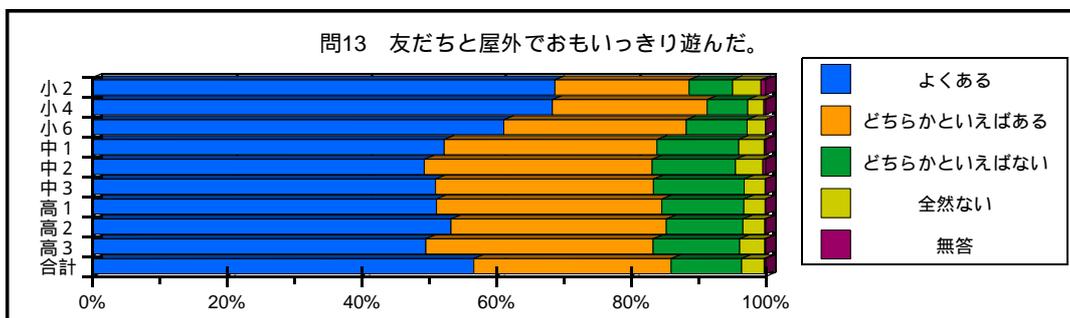


(ウ) 人に助けてもらった経験について



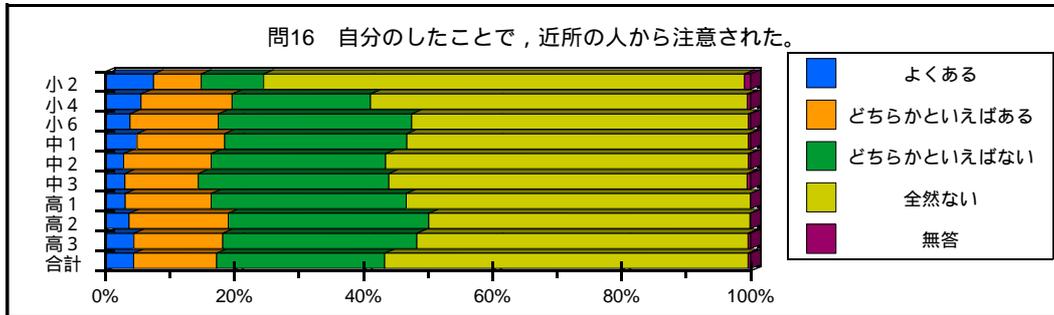
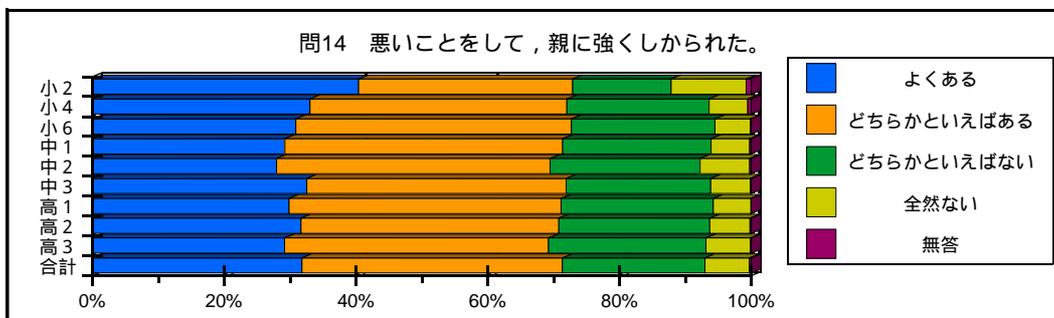
小学2年生で否定的回答（26.4%）が高いのは，困らないよう先回りして，周りが先に手を差し伸べているので助けてもらったという意識がないのではないかと思われる。

(I) 屋外でおもいきり遊んだ経験について



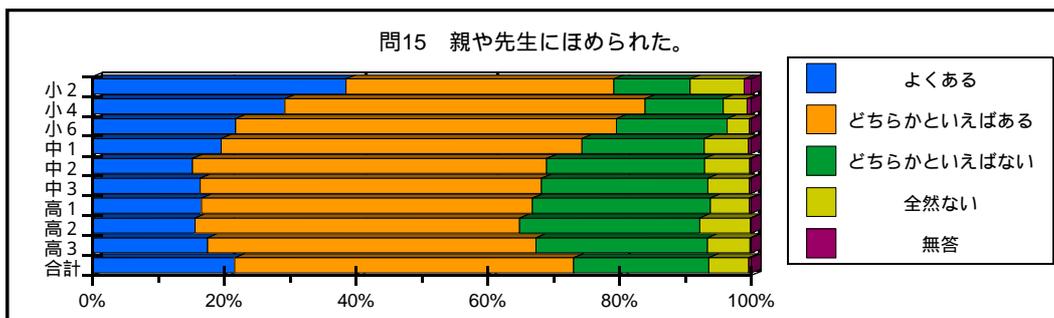
屋外で思いっきり遊んだ経験がある児童生徒は，肯定的回答で86.0%と高い。

(オ) しかられた経験について



親にしかられた経験と近所の人にしかられた経験を示している。親に強くしかられた経験のある児童生徒では，自己肯定感はやや低くなるものの，規範意識が高くなるといった結果を得た。また，近所の人にしかられた経験は，肯定的回答で17.2%と低い。

(カ) ほめられた経験について

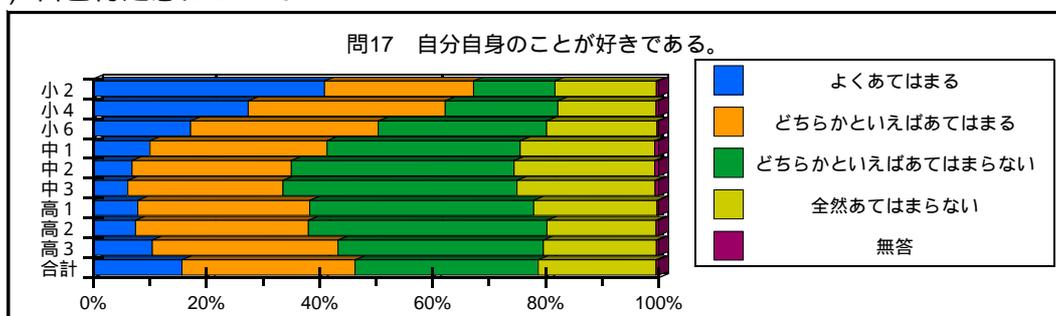


ほめられた経験は，肯定的回答で比較すると，小学4年生から高校2年生まで，学年が進むにつれて低下する。また，ほめられたことのある児童生徒とほめられたことのない児童生徒を比較すると，

ほめられた経験のある児童生徒ほど、規範意識、自己肯定感、自己存在感、自己有用感が高いといった結果を得た。問14, 16のしかられた経験からも、規範意識の育成にはほめることも大切であるが、時にはしかることも必要であることが推測される。

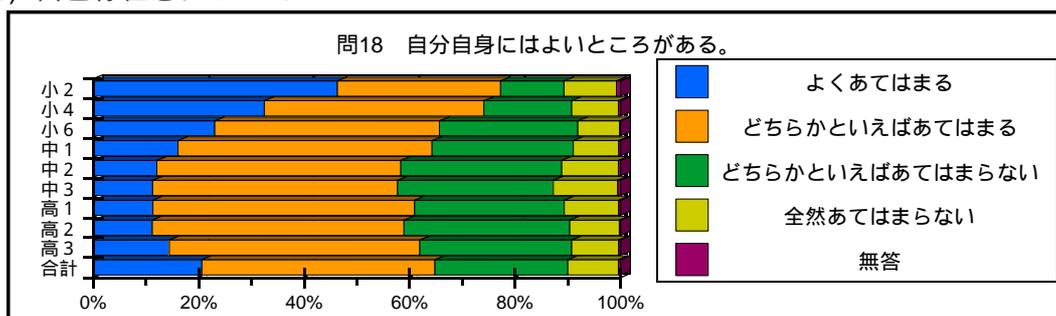
ウ 自己の意識について

(ア) 自己肯定感について



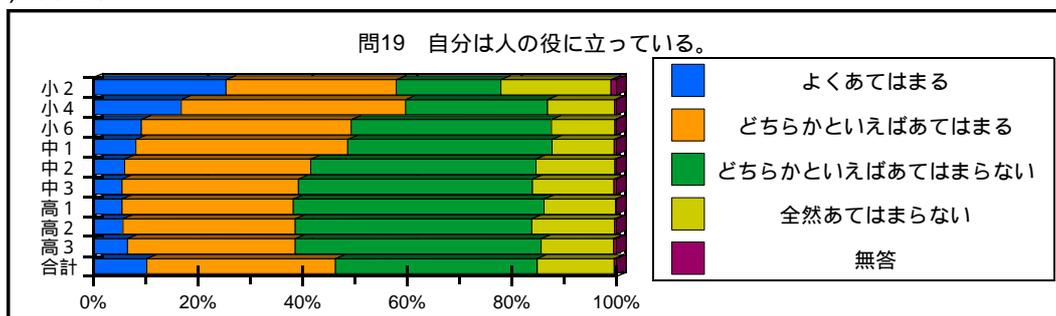
「自分自身のことが好きである」という設問についての肯定的回答は、中学3年生まで学年が進むにつれて低下している。特に、小学4年生から小学6年生、小学6年生から中学1年生における低下の割合が大きい。

(イ) 自己存在感について



「自分自身によいところがある」という設問についての肯定的回答は、中学3年生まで学年が進むにつれて低下している。特に小学4年生から小学6年生における低下の割合が大きい。

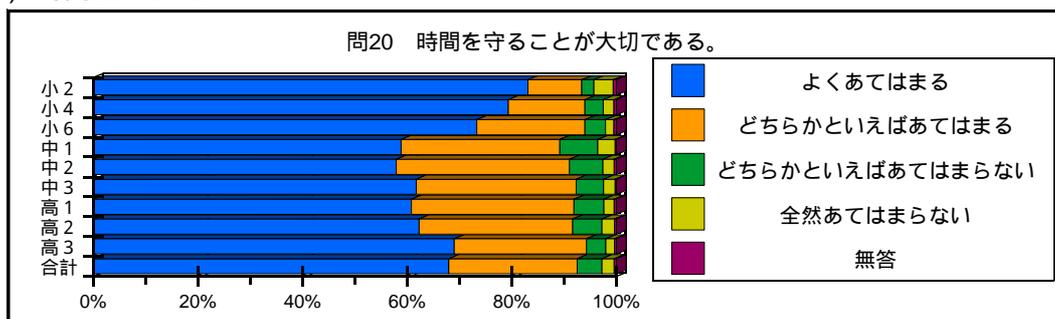
(ウ) 自己有用感について



「人の役に立っている」という設問についての肯定的回答は、中学3年生まで学年が進むにつれて低下している。特に、小学4年生から小学6年生における低下の割合が大きい。

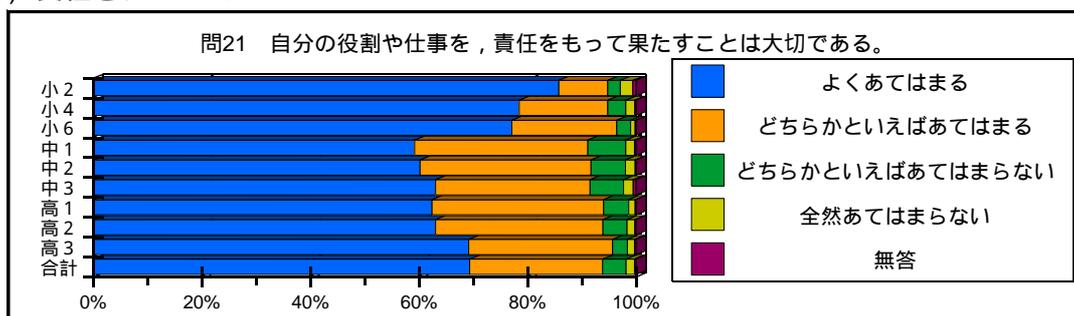
これらの点から、小学5, 6年生から中学3年生は心が大きく成長する時期であり、この時期の指導の大切さを感じる。

(I) 時間について



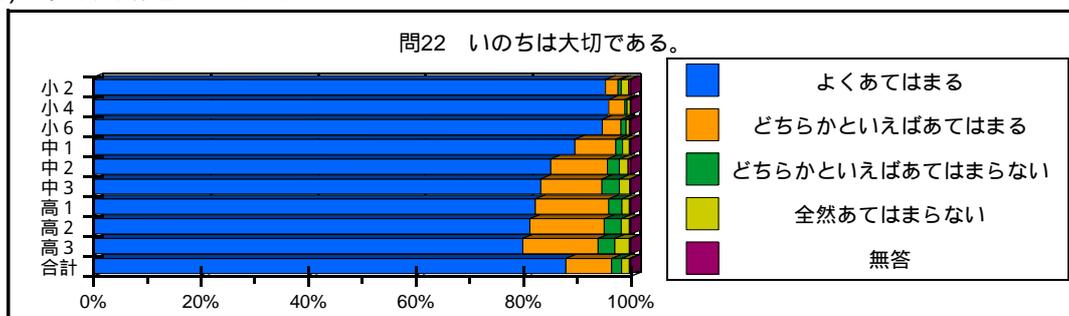
「時間を守ることが大切である」という設問についての肯定的回答は、小学生では93.8%，中学生では90.8%，高校生92.6%と、全体的にその意識が高い。

(オ) 責任感について



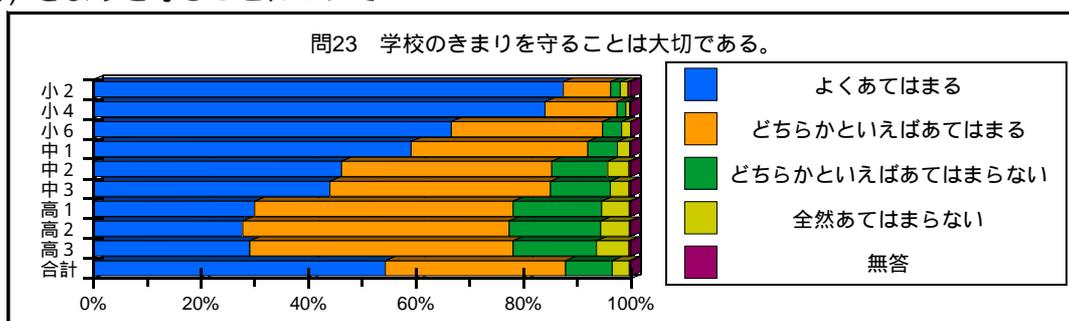
「自分の役割や仕事を、責任をもって果たすことは大切である」という設問について、「よくあてはまる」を選ぶ児童生徒の割合は、小学6年生では77.1%であったのに対し、中学1年生では59.2%と大きく低下している。しかし、肯定的回答をみれば、小学生95.3%，中学生91.4%，高校生94.5%と、9割以上の者が責任を果たすことが大切であると思っている。

(カ) 命の大切さについて



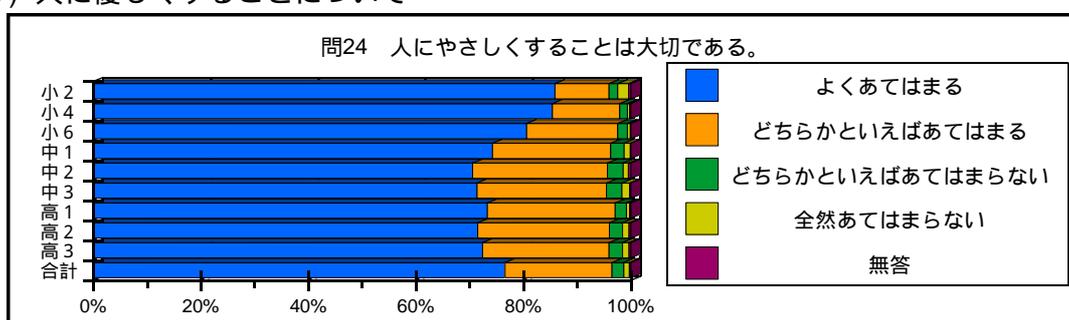
「いのちは大切である」という設問について、肯定的回答の割合は、小学生98.2%，中学生95.8%，高校生95.0%であり、その意識は全体的に高い。しかし「よくあてはまる」を選ぶ児童生徒の割合は、小学生では95.3%であったのに対し、中学生86.0%，高校生81.1%である。特に高校3年生では、79.9%まで低下する。否定的回答でみても、小学生で1.5%，中学生で3.8%，高校生4.7%としいにその割合が高くなっている。

(キ) きまりを守ることについて



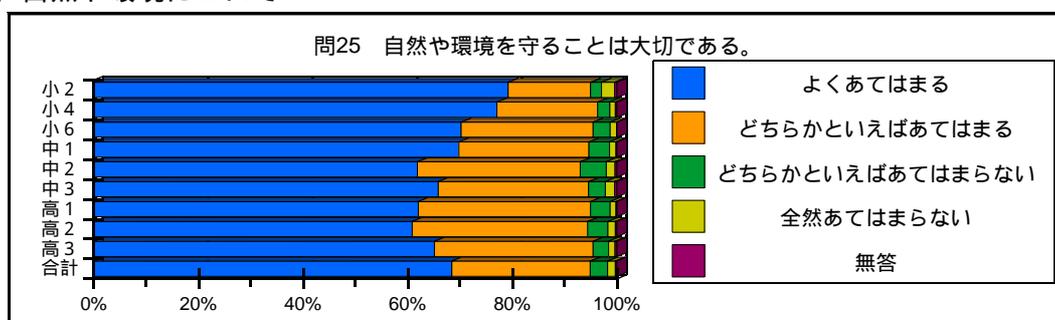
「学校のきまりを守ることは大切である」とう設問について、「よくあてはまる」を選ぶ児童生徒の割合は学年が進むにつれて低下し、高校生では29.2%にまで低下している。しかし、肯定的回答の割合からみれば、きまりを守る意識は全体で87.9%である。

(ク) 人に優しくすることについて



「人にやさしくすることは大切である」という設問についての肯定的回答の割合は、小学生97.2%、中学生95.8%、高校生96.4%と、その意識は全体的に高い。

(ケ) 自然や環境について

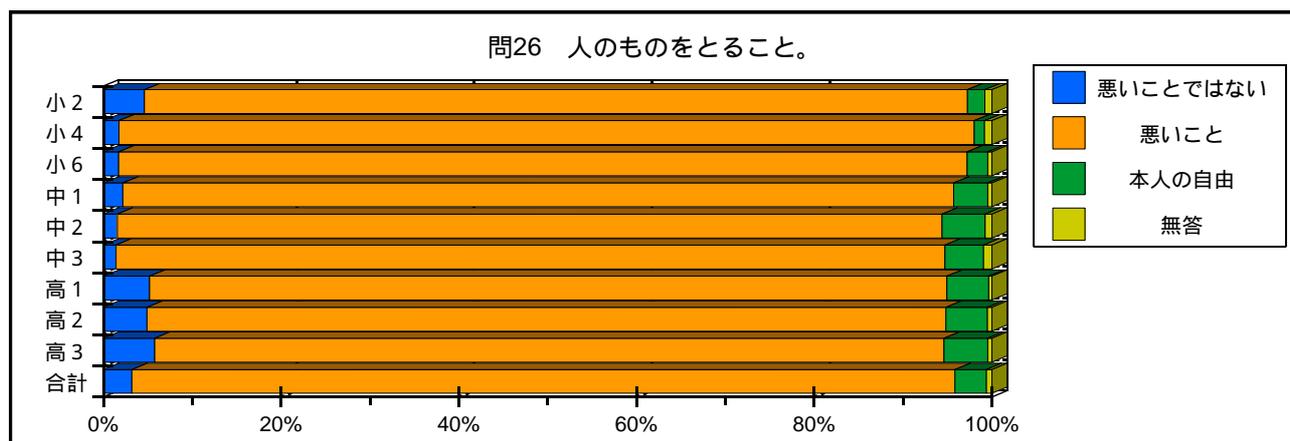


「自然環境を守ることは大切である」という設問についての児童生徒の肯定的回答の割合は、94.9%である。

以上の結果から、児童生徒は、学校生活の中で守るべきことなど、集団にかかわる意識については学年を追って低下する傾向にあるが、個人にかかわる道徳面での意識については大切に考える傾向がある。

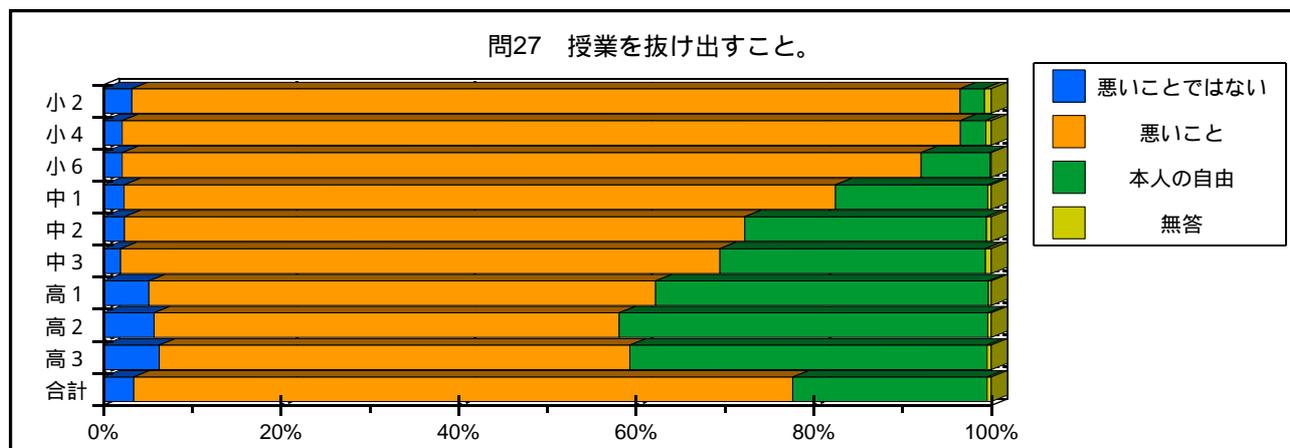
エ 具体的な規範意識について

(ア) 人のものをとることについて



道徳的な規範意識として一番分かりやすい「人のものをとること」について、3.2%の児童生徒が悪いことではないと回答していることは驚くべきことである。特に、小学2年生4.6%、高校1年生5.2%、高校2年生4.9%、高校3年生5.8%、高校生でその割合が高く、予想以上の規範意識の低下がみられる。また、「本人の自由」と回答する児童生徒も3.5%あることが気に掛かる。「してはいけない」とことと区別、理解はできていても、社会的にダメという理解に至っておらず、他人については本人の自由という誤った理解をしているのではないかとと思われる。

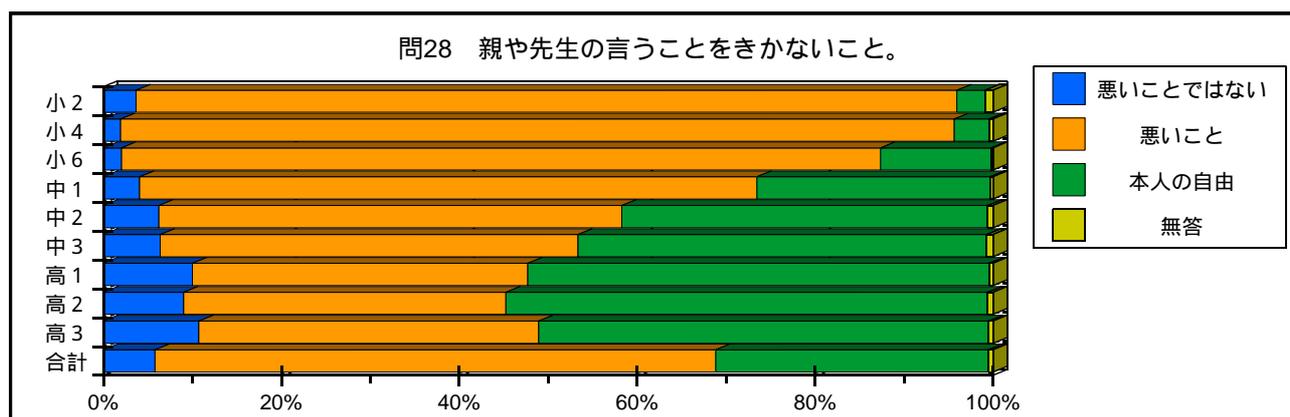
(イ) 授業を抜け出すことについて



「授業を抜け出す」については、3.4%の児童生徒が「悪いことではない」と回答している。「本人の自由」と答えた児童生徒の割合は、学年が進むにつれて高くなり、高校2年生では42.5%になる。高校生全体で39.7%とかなり高くなっている。

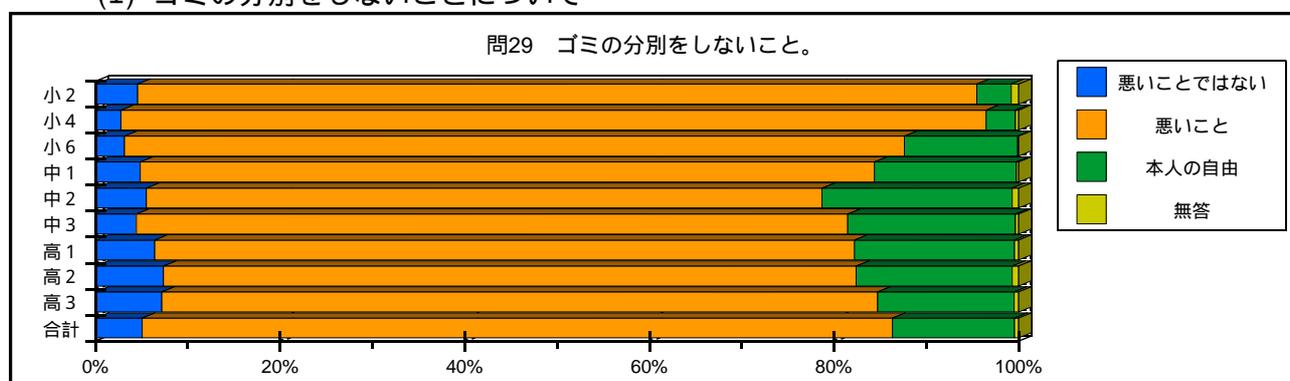
学校生活における規範意識の低下が心配であるとともに、背景に「自分は自分、他人は他人」といった考え方の蔓延^{まんえん}がうかがえる。

(ウ) 親や先生の言うことを聞かないことについて



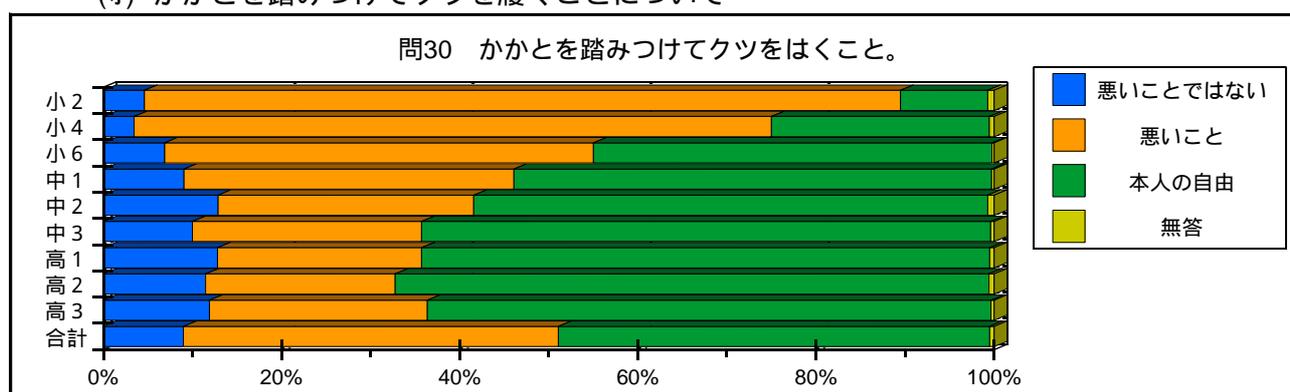
「親や先生の言うことをきかない」についても問27と同様の傾向である。5.8%の児童生徒が「悪いことではない」と回答している。特に、高校生ではその割合が9.9%になっている。また、「本人の自由」とする回答は、学年が進むにつれて高くなり、高校2年生では54.2%になっている。

(I) ゴミの分別をしないことについて



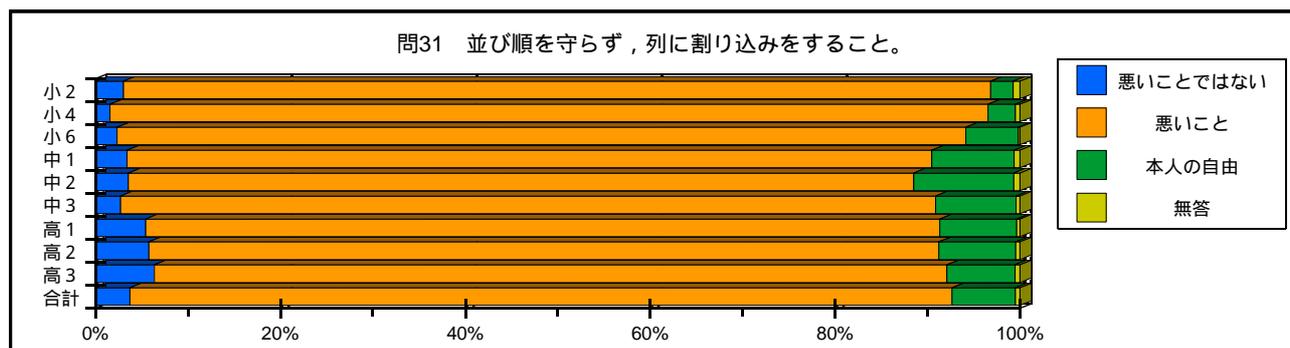
「ゴミの分別をしない」ことに対しては、5.1%の児童生徒が「悪いことではない」と回答している。また、「本人の自由」とする回答は13.2%であり、規範意識を問う質問項目の中では、低い割合になっている。環境教育の成果と言えるかも知れない。

(オ) かかとを踏みつけてクツを履くことについて



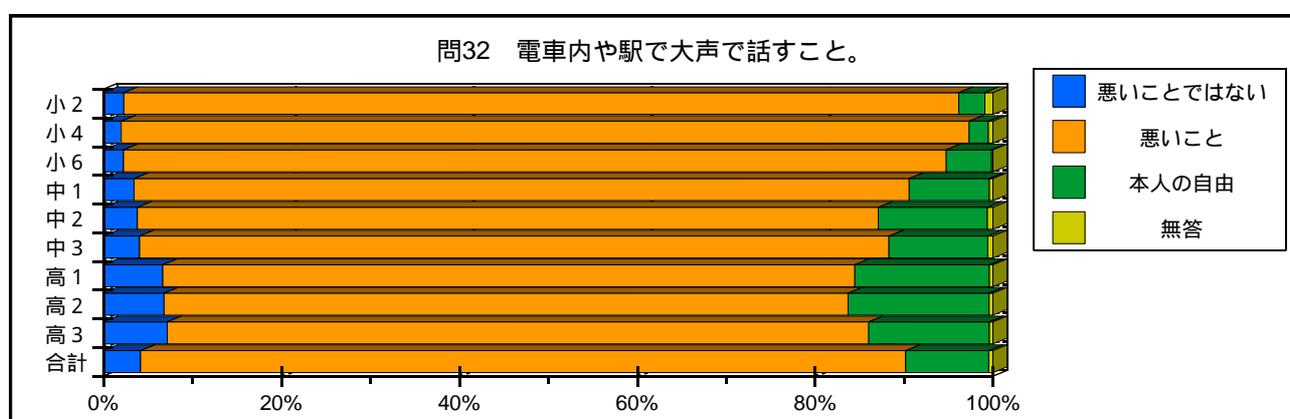
個人内規範の「かかとを踏みつけてクツをはくこと」に対しては、9.0%の児童生徒が「悪いことではない」と回答している。また、「本人の自由」とする回答は、全体で48.4%であり、学年が進むにつれて高くなり、高校2年生では、66.7%になっている。

(カ) 列に割り込みをすることについて



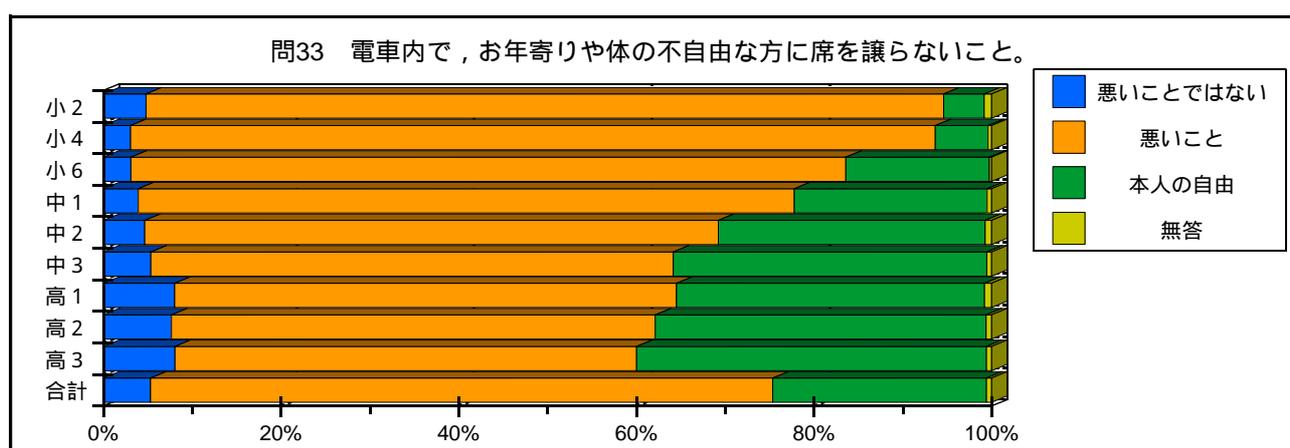
慣習的規範の「列に割り込みをすること」に対しては，3.7%の児童生徒が「悪いことではない」と回答している。特に高校生では5.9%と，その割合が高い。

(キ) 電車内や駅で大声で話すことについて



同じく慣習的規範の「電車内で大声で話すこと」では，4.2%の児童生徒が「悪いことではない」と回答している。学年が進むにつれて「悪いことではない」の割合が高くなる。特に高校生で6.9%と高い。

(ク) 電車内で，お年寄りや体の不自由な方に席を譲らないことについて



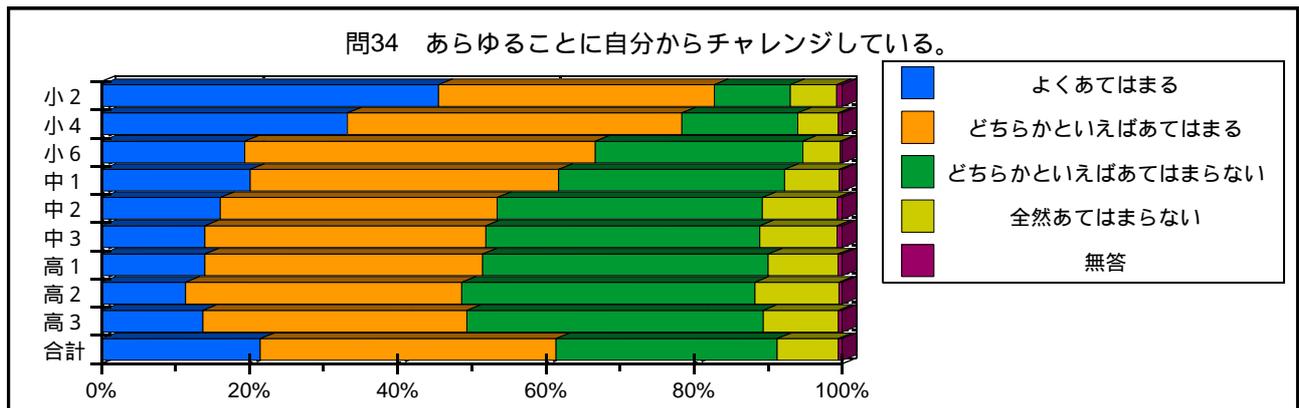
個人内規範の「お年寄りに席を譲らないこと」に対しては，5.3%の児童生徒が「悪いことではない」と回答している。高校生では7.9%と特に高い。また，「本人の自由」とする回答の割合は，小学6年生からしだいに高くなる。

個人内規範の「靴のかかとを踏む」や「お年寄りに席を譲らない」については，特に「本人の自由」とする回答の割合が高くなっていることが分かる。

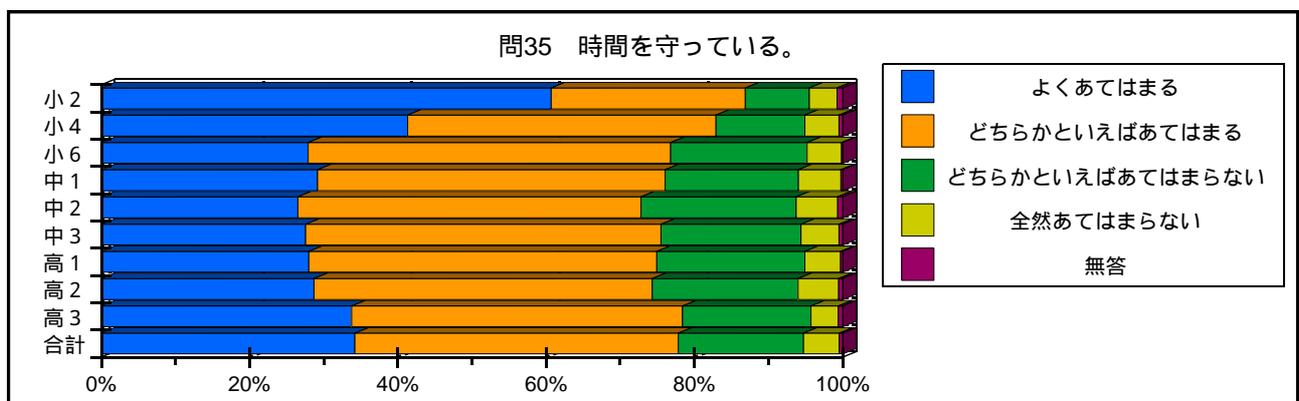
以上の結果から、全体的に規範意識の低さは否めない。また、「本人の自由」とする回答の割合が高いことについては、子供の主体性を重んじるがために、判断を本人任せにする大人の対応にも原因があるかも知れない。しっかりとした道徳性が身に付いていない段階で本人任せにすることは、かえって規範意識の低下を招くものと思われる。小学校低学年からしっかりと規範〔道徳的、慣習的、個人内〕を教えることの必要性を感じる。

オ 自己の行動について

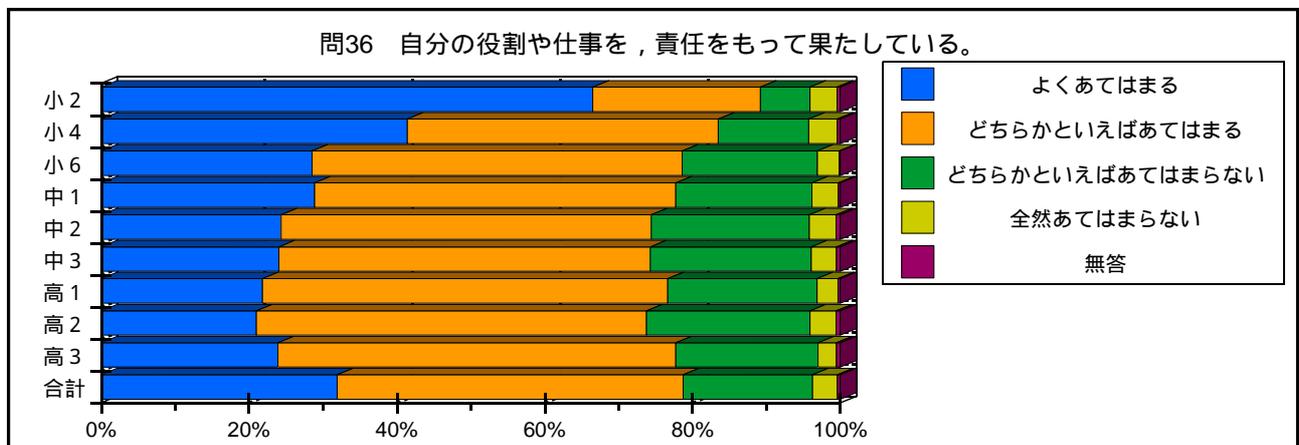
(ア) 自分からチャレンジしている行動について



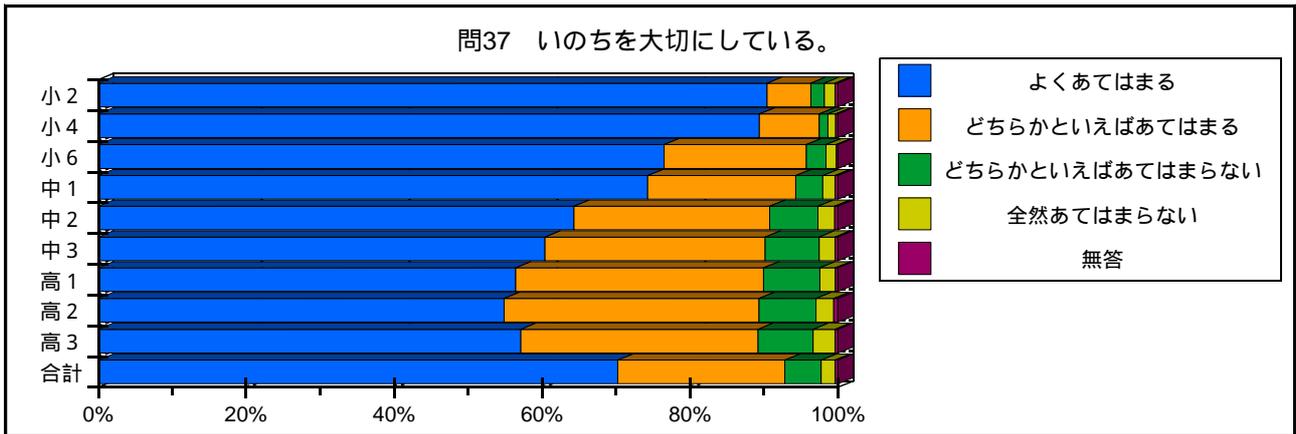
(イ) 時間を守っている行動について



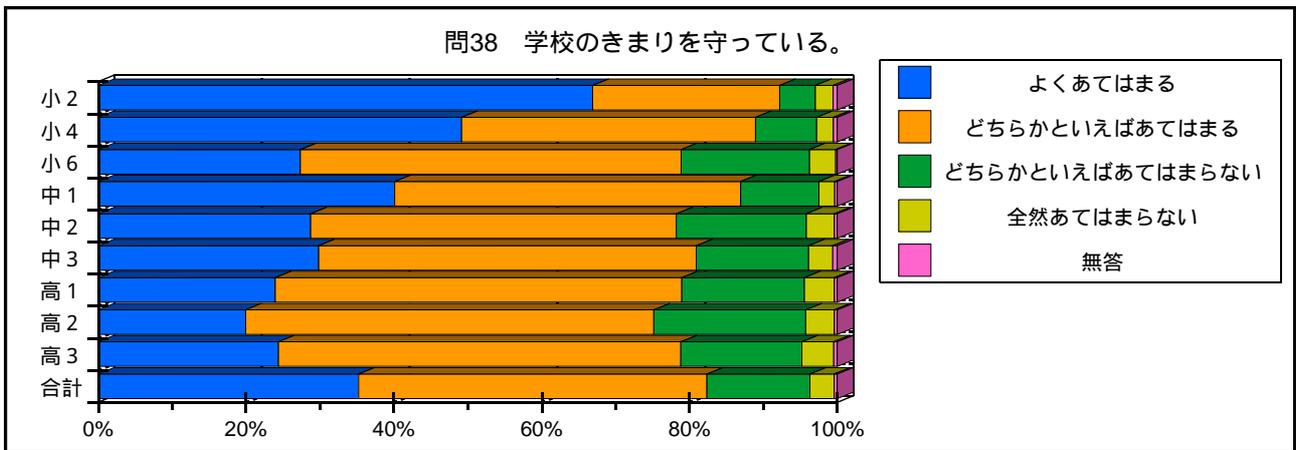
(ウ) 責任をもって役割を果たす行動について



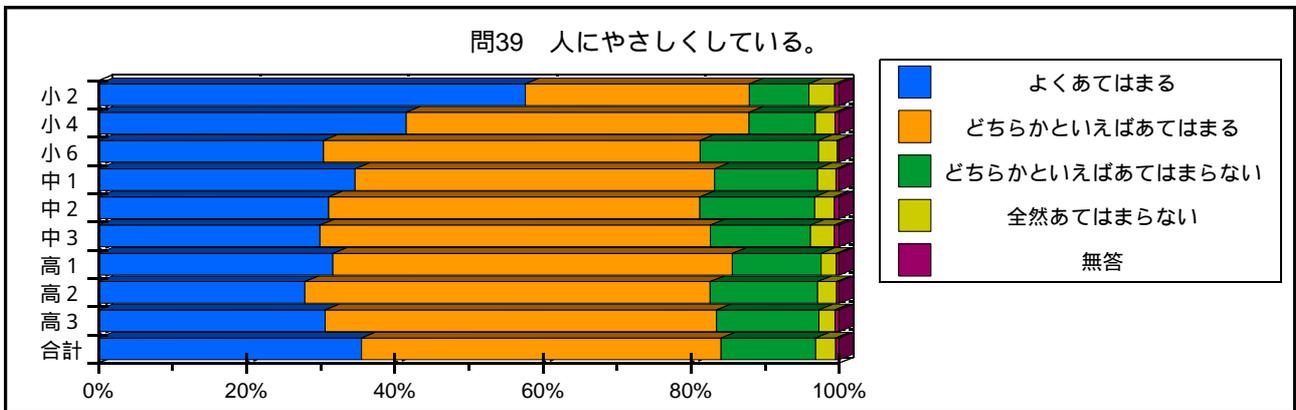
(I) いのちを大切にしている行動について



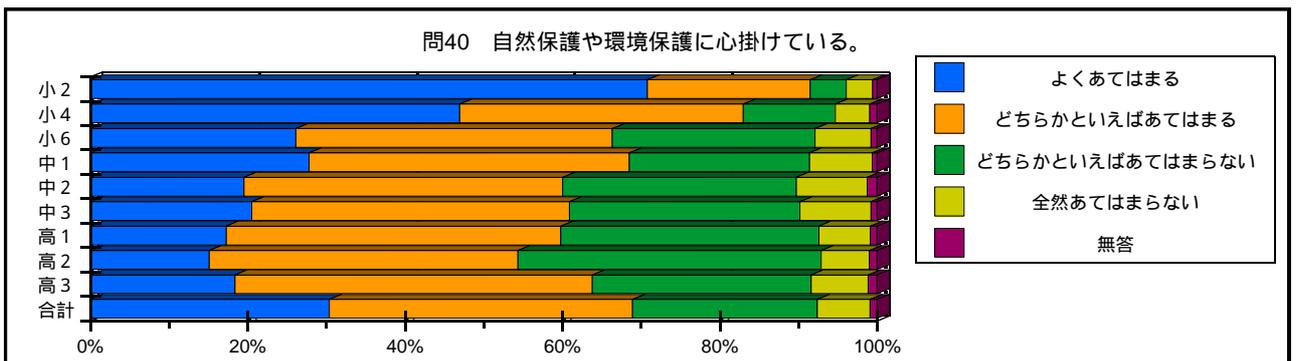
(オ) 学校のきまりを守る行動について



(カ) 人にやさしくする行動について



(キ) 自然保護や環境保護に心掛けている行動について



問34～40の自己の行動（11,12ページのグラフ）について「よくあてはまる」で比較すると、行動の積極性は質問7項目（「自分から進んでチャレンジしている」、「時間を守る」、「責任をもって役割を果たしている」、「いのちを大切にしている」、「きまりを守る」、「人にやさしくしている」、「自然環境保護を心掛ける」）のすべてにおいて、小学6年生で大きく低下している。この点から、小学5,6年生が思春期との関係からも指導の重要な時期になると思われる。

また、自己の意識（問21～25）と行動（問35～40）を比較すると（下記の表）、どの年齢においても、「時間を守ること」、「責任をもって役割を果たすこと」、「いのちの大切さ」、「きまりを守ること」、「やさしさ」、「自然環境保護」の意識と行動（実践）の間に乖離^{かいり}がみられ、意識が行動に結び付いていないことが分かる。

問20, 問35 時間を守ることは大切について

意識	意識の肯定的回答	行動	行動の肯定的回答
小学生	93.8%	小学生	88.2%
中学生	90.8%	中学生	74.8%
高校生	92.6%	高校生	75.9%

問21, 問36 役割や仕事を責任をもって果たすについて

意識	意識の肯定的回答	行動	行動の肯定的回答
小学生	95.3%	小学生	83.7%
中学生	91.4%	中学生	75.5%
高校生	94.5%	高校生	76.0%

問22, 問37 いのちの大切さについて

意識	意識の肯定的回答	行動	行動の肯定的回答(否定的回答)
小学生	98.2%	小学生	96.5%(3.2%)
中学生	95.9%	中学生	91.8%(7.8%)
高校生	95.0%	高校生	89.5%(10.1%)

少数ではあるが、「いのち」を大切にす意識の低下、及び「いのち」を大切にしない児童生徒の増加は気になる問題である。特に、高校生は10%以上「いのち」を大切にしていないと回答している。

問23, 問38 学校のきまりを守ることにについて

意識	意識の肯定的回答	行動	行動の肯定的回答
小学生	96.1%	小学生	86.6%
中学生	87.5%	中学生	82.0%
高校生	78.4%	高校生	77.6%

問24, 問39 人にやさしくすることについて

意識	意識の肯定的回答	行動	行動の肯定的回答
小学生	97.2%	小学生	85.6%
中学生	95.8%	中学生	82.3%
高校生	96.4%	高校生	84.0%

問25, 問40 自然環境を守ることに付いて

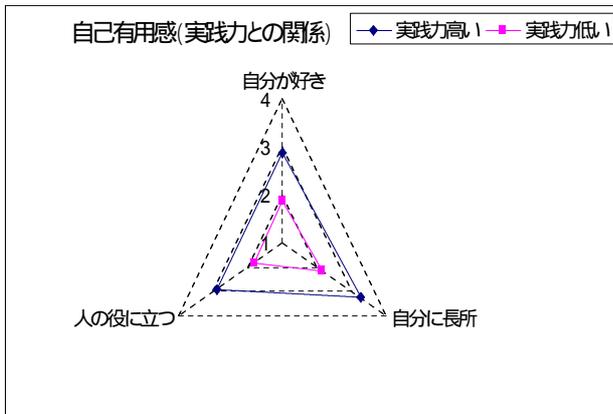
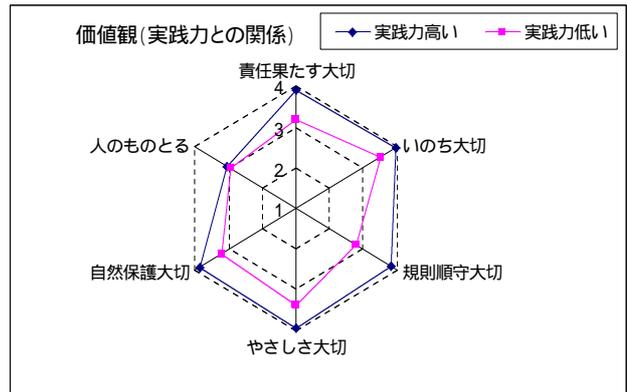
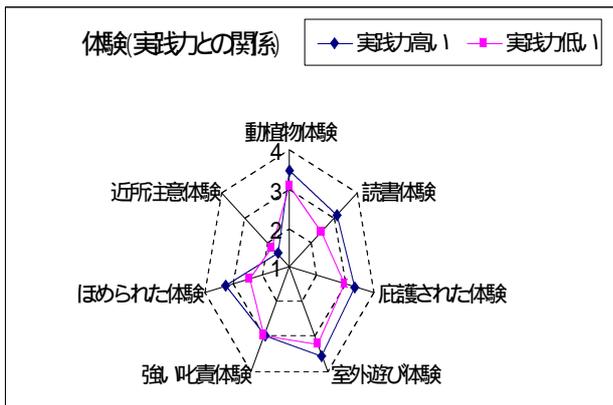
意識	意識の肯定的回答	行動	行動の肯定的回答
小学生	95.6%	小学生	80.1%
中学生	94.1%	中学生	63.1%
高校生	95.0%	高校生	61.3%

また、行動（実践力）に付いて比較すると、小学生と中学生、高校生の間に乖離^{かいり}がみられる。

カ 規範意識の分析に付いて

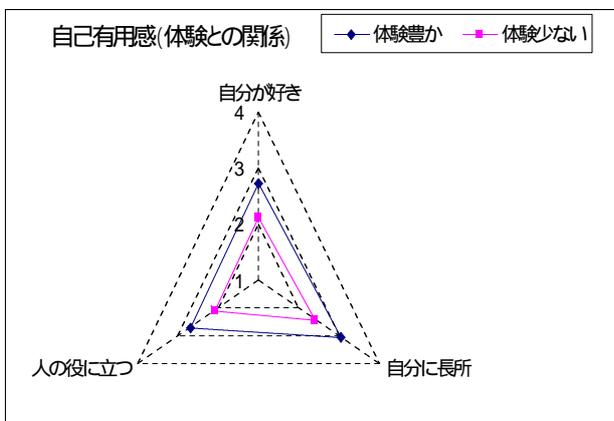
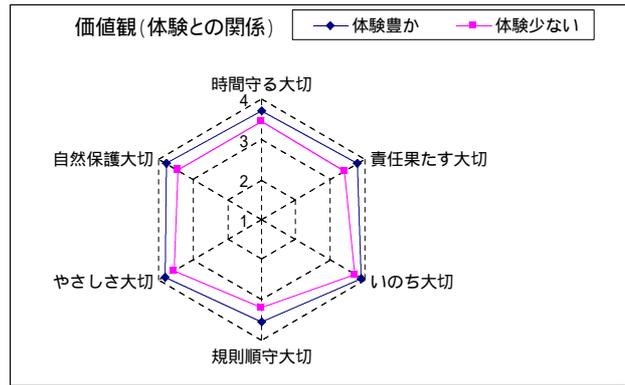
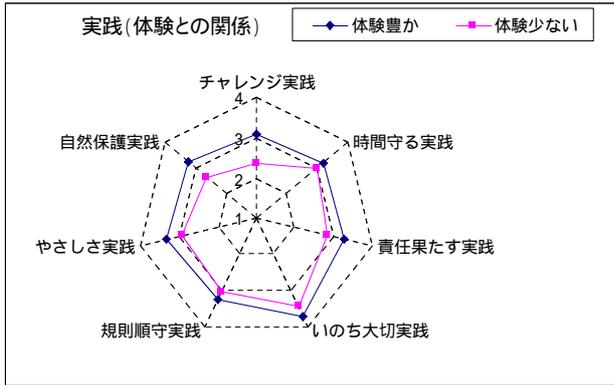
設問項目の内容から児童生徒の体験に関する項目、問11～16を「体験の豊かさ」、意識に関する項目のうち、問17～19を「自己肯定（存在，有用）感」（グラフでは自己有用感）、問21～26を「道徳的意識（価値観）」、行動に関する項目、問34～40を「実践力（行動）」とした。これらの関係に付いて分析するために、肯定的回答のグループを高いグループ、否定的回答のグループを低いグループとして、選択肢4項目の内容に依じて点数化し、平均を出して比較した。

(ア) 「実践力（行動）の高さ」による比較



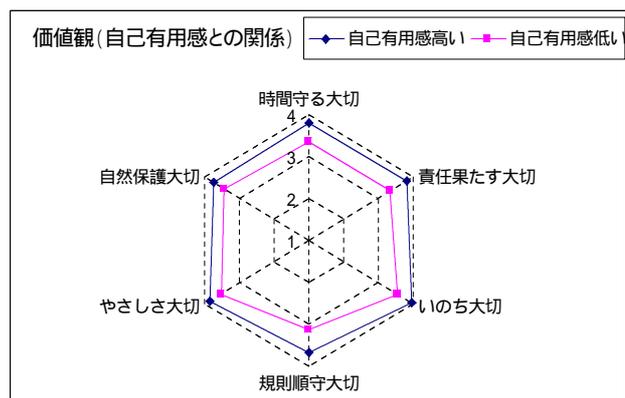
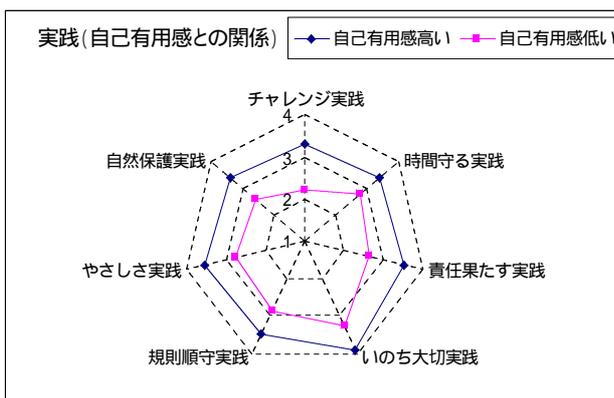
実践力（行動）の高いグループと低いグループの比較では、高いグループの方が、過去の体験が豊かで、道徳的な意識（価値観）、自己肯定感が高い。

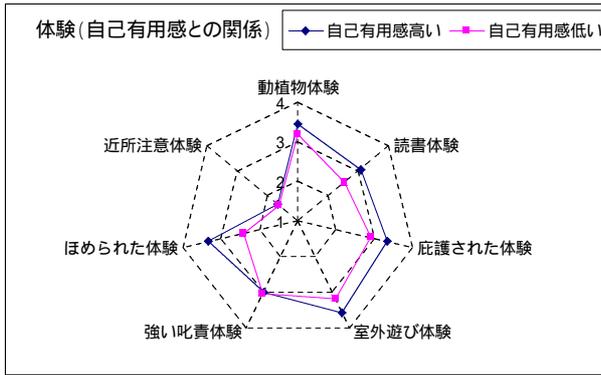
(イ) 「体験の豊かさ」による比較



体験の豊かなグループと体験の少ないグループとの比較では、豊かなグループの方が実践力(行動)があり、道徳的な意識(価値観)、自己肯定感が高い。

(ウ) 「自己肯定感の高さ」による比較





自己肯定感の高いグループと低いグループの比較では、高いグループの方が実践力（行動）、道徳的意識が高く、体験が豊かである。

(I) 「自己肯定感の高さ」と規範意識の比較

(%)

		人のものをとる	授業中に立ち歩く	言うことを聞かない	ゴミの分別をしない	靴のかかとを踏む	列の割り込み	車中で大声で話す	席を譲らない
高い	1	3.4	3.6	5.6	4.1	7.3	3.3	3.6	5.3
	2	94.1	83.6	76.9	87.7	59.5	92.0	89.9	78.6
	3	2.1	12.7	17.3	8.0	33.0	4.5	6.1	15.8
低い	1	3.5	4.3	7.0	6.6	10.9	4.7	5.8	6.1
	2	90.4	65.1	53.3	74.4	32.5	84.6	80.4	64.7
	3	5.9	30.5	39.5	18.7	56.3	10.6	13.7	28.8

* 数字の1, 2, 3は選択肢を示す(1 悪いことではない 2 悪いこと 3 本人の自由)

(オ) 「実践力の高さ」と規範意識の比較

(%)

		人のものをとる	授業中に立ち歩く	言うことを聞かない	ゴミの分別をしない	靴のかかとを踏む	列の割り込み	車中で大声で話す	席を譲らない
高い	1	3.3	3.2	4.6	3.9	5.4	3.2	2.9	5.0
	2	95.1	87.9	82.1	90.2	66.0	93.6	93.4	84.7
	3	1.1	8.7	13.1	5.7	28.4	2.8	3.4	10.1
低い	1	3.8	5.0	7.8	8.6	14.4	5.4	5.9	6.9
	2	86.3	57.0	42.7	66.4	22.8	80.4	74.8	53.4
	3	9.4	37.6	49.2	24.7	62.4	13.9	19.0	39.1

1 悪いことではない 2 悪いこと 3 本人の自由

(カ) 「体験の豊かさ」と規範意識の比較

(%)

		人のものをとる	授業中に立ち歩く	言うことを聞かない	ゴミの分別をしない	靴のかかとを踏む	列の割り込み	車中で大声で話す	席を譲らない
豊か	1	3.8	4.1	6.4	4.9	8.5	4.1	4.6	5.2
	2	93.1	77.6	68.7	85.9	49.5	90.4	88.3	75.8
	3	2.7	18.2	24.8	9.0	41.8	5.3	6.8	18.7
低い	1	3.8	4.3	7.6	7.4	12.6	5.0	5.3	7.3
	2	90.1	68.7	53.7	73.1	32.2	85.2	81.2	60.7
	3	5.8	26.8	38.4	19.3	55.0	9.6	13.2	31.7

1.悪いことではない 2.悪いこと 3.本人の自由

体験の豊かさ(7項目),自己肯定感(3項目),行動(7項目)のそれぞれの選択肢の内容に応じて点数化して比較すると,体験が豊かなグループは行動力,自己肯定感,道徳的意識が高くなっている。自己肯定感の高いグループは,体験豊かで,道徳的意識,行動の積極性が高くなっている。また同様に規範意識との関係では,体験豊かで,自己肯定感,行動力が高いグループは,規範意識が高いと言える。

[本文に戻る](#)